

一般社団法人
日本美術教育学会
会報
2024
01.31

○事務局 新聞申込
東海大学児童教育学部児童教育学科
e-mail: honbu@aesj.org
○編集部 藤田雅也
〒422-8021 静岡県駿河区小滝2丁目2番1号
静岡県公立大学法人 静岡県立大学
短歌大学部 こども学科 (美術教育研究室)
e-mail: fujitai@u-shizuoka-ken.ac.jp
tel&fax: 054-202-2687 (研究室)
○編集部 (会報) 水谷誠孝

静岡支部のこれまで

日本美術教育学会は、美術教育の理念を究明し、より良い教育実践の方策を探求することを目的として、1951年に創立されました。一方、静岡支部は、学会創立から8年後の1959年3月24日に、会員5名での研究会が開催され、それが静岡支部の起源とされています。以来、実践を通して美術による人間教育を探求し続けています。支部には保育園、幼稚園、こども園、小学校、中学校、高等学校、大学および美術館等、幅広いフィールドに籍を置く会員がおり、実践を紹介しあって研鑽を積む「支部研究会」を毎年3回開催しており、支部研究会の開催に合わせて年間3回の「支部会報」を発行しています。支部研究会での実践発表を経て、学術研究大会で発表をしたり学術研究大会に参加した支部会員が支部研究会で大会の様子を報告したりすることで、より質の高い研究となるよう取り組んでいます。

静岡支部では、これまで5回の学術研究大会を開催してきました。

第73回学術研究大会 静岡大会に向けて

静岡大会実行委員長
磐田市立竜洋中学校校長

鈴木 秀幸
SUZUKI, Hideyuki

年	回	テーマ
1980	29	美術教育では子供の何を育てるのか
1984	33	子供の見方・感じ方をどう育てているのか -感性の発達特性に応じて-
2000	49	本心から表現する心を育てる -つくりだす喜びを味わう子供の姿を求めて-
2006	55	つくりだす喜びから生きる喜びを求めて -美術教育の力を改めて問う-
2015	64	授業を変える「結果としての教科」から 「過程としての教科」へ

静岡支部の新たな研究テーマ

静岡支部では2013年から支部の研究テーマを「授業を変える～結果としての教科から過程としての教科へ～」として“保育”や“授業”に特化したテーマで研究をしてきました。これは、指導者の日々の保育、授業の在り方を見つめ、子供の姿から保育者や授業者の指導改善、支援改善へとつなげる研究でした。2015年、静岡県熱海市のMOA美術館で開催された第64回学術研究大会では、「日々の授業」をもう一度子供の姿から見直し、授業の中での子供の「美の発見」に気づく教師の「見る力」を高めることにより、「授業の過程で子供が輝く（成長する）瞬間が見えてくる」、「子供のもつ感性や感覚が見えてくる」「美術の魅力や価値を子供と共有できる」ことを提案しました。

静岡支部では、これまでの研究の成果を認めつつも、最近の社会情勢や今後の変化を予想すると、園や学校での保育、授業から、もっと視野を広くし、子供たちが生

涯にわたって豊かに、幸福に生きていくために、よりよい世の中をつくり維持していく、すなわちウェルビーイングに向かうアートがもつ意義や存在価値について見つめていく必要があることを強く感じるようになりました。

そのような中、日本美術教育学会理事会より2024年に開催される第73回学術研究大会について静岡での開催依頼がありました。これを良い機会と捉え、新たな研究テーマを設定し、支部としての研究を深めていきたいと考えました。そして、前述のような思いから、新たなテーマを「アートの意義と教育における存在価値を見つめる」と設定しました。

以下の文章は、ある中学生が中学校3年間の美術科での学びを振り返って記述したものです。

中学で美術というものを習い始めてから、その奥深さというものがだんだん見えてきて、ただ絵を描くだけが美術ではないと感じた。大昔、文字の始まりは絵だったし、人はデザインをすることで豊かさを求めてきた。しかし、今の世の中はパソコンで決まりきったことをやるだけで、人々の感受性や、美しいと思う感情が少なくなってきた気がする。美術は5科目の中に入っているわけでもないし、ほとんどの人が将来必要とせず、それでも生きていける。けれど、私は、人間にとって大切なものを美術で学べると思う。どんなにパソコンなどの機械が流通しても、人と人が話すときのコミュニケーションは全く変わらない。だから美術でいろいろな見方、考え方を学ぶことで、人に対しての理解を深めることを可能として、初めて私たちは豊かな生活をつくることができるのだと思う。また、美術が教える「美しさ」とは、ただ単に、うわべだけが綺麗なものではないことも知ることができた。「美しさ」にはいろいろなものがあり、それを美しいと感じることも強制されない。むしろ美術とは、その人の直感的な気持ちを重んじる、個々が違ってこそ美しいと思える教科だと感じた。

人は「美しさ」を感じるができる動物だ。それはとても素晴らしいことだし、私たちは幸福だと思う。私たちは、これから、そのすごい能力を失わないようにすると同時に、何が美しく何が美しくないのか、だけでなく、美しくないとされている中にも価値を見だし、それを引き出してあげられるような人となるべきだと思った。

この生徒は「美しさを感じるができる」ことを「素晴らしいこと」であり「幸福なこと」と実感しています。また「美しくないとされている中にも価値を見だし、それを引き出してあげられるような人となるべきだ」という考え方には、

自分だけでなく他者や社会の豊かさや幸福感につなげようとする考え方が見てとれます。

静岡支部では、アートのもつ力を信じ、アートが子供たちの人格形成、人間教育には欠かせないものであること、アートが子供たちの未来を拓くものであることを日々の実践を通して確認していきたいと考えます。それによって美術教育の新たな地平を拓いていきたいと考えています。

静岡大会の概要

開催日：2024年8月17日（土）、18日（日）

会場：静岡県立大学 小鹿キャンパス

大会テーマ：

アートの意義と教育における存在価値を見つめる

記念講演について

講師：尾池和夫氏（静岡県立大学学長、理学博士）
尾池和夫先生は1940年、東京生まれ。京都大学理学部を卒業され、京都大学総長、京都大学名誉教授、京都造形芸術大学学長、静岡県公立大学法人理事長、京都芸術大学学長などを歴任されています。2021年からは静岡県公立大学理事長兼静岡県立大学学長としてご活躍されています。

ご専門は地球科学、地震学で『四季の地球科学－日本列島の時空を歩く－』（2012年）岩波新書、『2038年南海トラフの巨大地震』（2015年）マニユアルハウス、など地震関係の著書も多数あります。また、俳句にも造詣が深く『氷室俳句会』を主宰され、『句集・大地』（2004年）角川書店、『句集・瓢鮎図』（2017年）角川俳句叢書、『季語の科学』（2021年）淡交社などの著書があります。

2023年9月26日、静岡県立大学を訪問し尾池和夫学長にお会いしてきました。尾池学長との面会では自然科学のお話から芸術のお話まで、論理の世界のお話と感性の世界のお話が往還し、大変興味深いものでした。学長室には多くの絵や書や彫刻が飾られ、それら一つ一つの作品のお話も聞かせていただき、1時間ほどの面会時間があっという間に過ぎてしまいました。来年の記念講演が非常に楽しみです。

静岡大会開催地、会場について

静岡支部はこれまで5回の学術研究大会を開催してきましたが、そのうち4回は県西部の浜松市で、第64回大会は県東部の熱海市での開催でした。第73回大会では、初めて、県中部で県庁所在地でもある静岡市での開催となります。

静岡市は、かつては「駿府（すんぶ）」と呼ばれ、栄えていました。大河ドラマ「どうする家康」の主人公徳川家康が人生の1/3を過ごした地です。家康は、幼少時代には今川義元のもとで暮らし、今川家臣 関口氏純の娘、瀬名姫（築山殿）と結婚しました。2度目の駿府の暮らしは45歳から49歳までで、5か国を治める大大名となっていました。

そして、66歳から亡くなる75歳までは「大御所」として暮らしました。静岡市内には、家康が幼少期に学んだ「臨濟寺」や大御所時代を過ごした駿府城の跡である「駿府城公園」、死後にまつられた「久能山東照宮」など家康ゆかりの地がたくさん残っています。

静岡市には、模型メーカーが多く集まり、プラモデルの出荷額が全国の80%以上を占めるなど「ホビーのまち」としても知られています。プラモデルを活用したまちづくりが進められ、市内にはプラモデルのパーツを模したモニュメントも見られます。

大会会場の静岡県立大学 小鹿キャンパスは「JR静岡駅」からバスで15分とアクセスの良い場所に位置しています。静岡大会で、皆様とお会いできることを楽しみにしております。

「ものがたり」がうまれる環境 —こどもたちの面白すぎる世界—

昭和学院短期大学 人間生活学科 こども発達専攻 助教

馬場 千晶 BABA, Chiki

1. はじめに

私は現在大学所属をしつつ、東京都中野区のA保育園にてたくさんの乳幼児と深く関わる仕事もしている。長年携わっていても、こどもたちの発想や表現力には毎回「うーん、なるほど!」と唸ってしまう。最近そんな風に「唸って」感動した出来事をきっかけに、こどもたちとの日常の遊びの中での気付きや学びを、実践報告の内容とさせて頂く。今回のキーワードは『ものがたり』である。

2. こどもたちの世界の入り口へ

きっかけになったのは、前述のA保育園での出来事。この日の5歳児クラスは、初めてパレットで色作りをして絵を描くことを楽しんでた。赤・青・黄・白などを混ぜしながら、思い思いに遊んでいる中で、Kくんが話かけてきた「先生見て見てー!! ほくの絵、どう思う?」。

とても魅力的な興味深い絵。形も面白いし、色もたくさん混ざっていてすごく美しい。絵を見ながらどのように返そうかと迷っていると、Kくんから思いがけない、印象的な言葉が飛び出した(図1)。

『ほくはさ、なんかさ。この絵がまるでさ。ものがたりの色みたいだと思うの。そう思わない?』。



(図1) <ものがたりの色の絵> Kくん作
言われてみると「ものがたり」を感じないだろうか。

『ものがたりの色』!?なんて素敵な表現なのだろう。何かが始まりそうな、ワクワクするような、確かにこんな色のものがたりを知っているような……。『ものがたりの色』という言葉に、大人の私でも壮大な想像の世界が目の前に広がった。こどもたちのワードセンスには本当に関心させられる。

さてここまで読んでくださった皆さま、どのような「ものがたり」が浮かんでいるだろうか。「言われてみると、こんなものがたりかも……」と想像の世界が広がっているかもしれない。こどもたちの世界には、このように大なり小なり彼らだけの、ものがたりがある。今回は遊びの中で偶然にもそんなものがたりが生まれた、いくつかの事例を紹介したい。

3. 『ものがたり』が生まれる<造形コーナー>

こどもたちはふと、思いついたことを描いて誰かに伝えたり、「いーこと考えた!」と急にアイデアを形にしたりする。表現すること自体がとても楽しい遊びの一つであり、いつでも存分に行うことができる環境づくりが重要だと考えている。その際に、活躍する素材は、菓子箱やお肉のトレイ、卵のパックなどの、いわゆる「廃材」だろう。(生活素材、リサイクル素材等、昨今呼び方はそれぞれ。本稿では全て含めて「廃材」と呼ぶことにする。)

こどもたちにとって「廃材」は発想が次々生まれる「お宝」である。自分で選んで組み換え、組み合わせたり、描いたり作ったりしながら、頭の中で様々なものがたりが生まれる。

B幼稚園の<造形コーナー>の事例もその一つ。この園は好きな時間にこどもたち自身がコーナーを作ることができるシステム。一番人気は<即席造形コーナー>(図2、図3)。まずは保育室の隅に、自分の家から持ってきた「お宝」がたくさん入る<廃材ボックス>が設置してある。次にその箱の近くにある棚には、自由に持ち出すことができる<道具セット>(ペン、はさみ、ホチキス、簡単に使える紙類やシール、テープなどが容器に入っているもの)が用意してある。



(図2) 即席造形コーナーの様子



(図3) こどもたちが毎日持ってきてくれる「お宝」

<廃材ボックス>と<道具セット>を、空いている机に持ってくれば、<即席造形コーナー>が出来上がる。こどもたちが作りたい時に、すぐにその場所を作ることができる環境は、創造の時間が始まる最高の条件の一つ。ここで作られたものは、家に持ち帰る子がほとんどだが、保育室の壁にあるギャラリーに飾ることもでき、こどもたちの考えていることが直に伝わってきてよい刺激となっている。そんな<造形コーナー>で作ったものが、こどもたちの中でより、ものがたりの世界へと昇華した事例を次に紹介したい。

4. 廃材から生まれた『ものがたり』

A 保育園の建て替え前の古い園舎には、自分の荷物を入れる棚が一人ひとつあった。上下に分かれていて、下は荷物を入れる大きな棚、上は「お道具箱」を入れる小さな棚である。しかし現状のA 保育園では、道具は共有にし、お道具箱をなくしたため、このスペースを持って余していた。そこで園では、小さな上段を「こどもたちが自由に使えるスペース(作ったものや、使いかけのものを置く自由な空間)」とした(図4)。



(図4) ロッカーの上の、お道具箱用の空きスペース。かなり狭いが自由に使える空間として、今後たくさん活躍する。

主にその日保育園で作ったものを入れるスペースとして機能することになったロッカー。高さ約25cm、幅35cmほどの空間は、折り紙製のたくさんの武器、廃材で作ったヘンテコなもの、お手紙や、手作り絵本コレクション、または外から拾ってきた石や葉っぱを飾ったりなど、一人ひとりの思いが垣間見ることができる、「棚ギャラリー」となった。

ある日、自分の「棚」の前で一人言をぶつぶつ言っ

ている女の子がいた。それはとても想像力が豊かなCちゃん……。「後でごはん持ってくるね」「また明日ね」。こっそり近づいて覗いてみると、そこにはなんと「鳥」が居た！彼女のロッカーには、卵のパックと毛糸で彼女が作った小さな鳥が住んでいた(図5)。



(図5) 卵のパックの上部を切り取り、中に白い毛糸を入れ、目や口ばしを丸シールで作られた小鳥。確かに愛でたくなる。

その後Cちゃんの「絶対ひみつ！」な鳥のお家は、どこからともなく知られ密かに憧れられ、ロッカーで動物生息ブームが起こる。数日後いつも通り「棚ギャラリー」の見物をしていると、なんと「テープの芯ちゃん」が住んでいる棚があった(図6、図7)。合成繊維製のテープの芯は、少し縦長なので、上部に顔を描くと、より生物味を感じる。こどもたちは私たちが思う以上に色々考えてものを作っていることに非常に感銘を受けた。



(図6)「テープの芯ちゃん」

(図7)「卵のパックの鳥くん」と「テープの芯ちゃん」が仲良くなる、ものがたり。

気に入った素材で空間で、思い思いのものを作り、すぐに自分だけの世界を作ることができるこどもたち。彼らの『ものがたり』が始まるきっかけは、無数にあるのだとつくづく感じた¹⁾。

5. 環境としてのロッカー

ロッカーを「環境」として活用した事例は他にも多々ある。例えばC 幼稚園では、大きなロッカーが丸々使われなくなった為、作りかけのものや作品を置く「箱ギャラリー」として廊下に設置。他の子が見たり、アイデアに触発されてまた作ったりと、創造性をお互いに刺激し合う場となっている(図8)。



(図8) C 幼稚園の廊下にあるロッカー。作りかけのもの、完成したものが混在している所に、こどもたちの楽しんでいる様子が伺える。

この事例を真似したくなった A 保育園の先生たち。同じく廊下に見立てたダンボールで作った四角い箱ギャラリーを設置してみた。子どもたちはとても喜んだが、それはギャラリーとしてではなく、「マンション」としてのものだった。一つひとつが部屋に見えたのだろう、カーテンがかかっていたり、誰か布団で寝ていたり、別の部屋では事件が起きて立入り禁止になっていたりする（図9、図10）。



(図9) <廃材コーナー>に布のような異素材が置いてあるのも世界が広がるきっかけになる。



(図10) ここでもまた各々のものがたりが生まれていた。空想の世界は、子どもたちの生活の中に深く溶け込んでいる。

6. おわりに

子どもにとって『ものがたり』を作ることは、とても重要な自己実現の一つ。のびのび表現するためには、(本稿でも、多々触れているように) 保育者による環境設定や表現の受け止めは不可欠である。援助をしつつも、子ども一人ひとりに合った、自分らしさを発揮できる楽しい創造的な時間を保証していきたい。またこのような活動を現場発信で有意義な実践報告にし、子どもの表現の面白さを共有していきたいと思っている。

- 1) このエピソードは、『美術教育と子供理解』（大橋功 監修：鈴木光男・藤原智也・長瀬拓也・服部真也編著、日本文教出版、2022）に詳しく載せています。

一般社団法人日本美術教育学会 2023年度第2回理事会報告

日時：2023年8月10日（木）12：00～13：20

場所：中部学院大学・各務原キャンパス

出席者：細谷僚一、大橋功、新関伸也、松岡宏明、藤田雅也、清田哲男、鳥越亜矢、詫摩昭人、青木宏子、大会実行委員長・浅尾知子（敬称略、順不同）

欠席者：（委任状）佐藤賢司

- ・欠席監事1名から書面決議書が提出されていることが報告され、理事会の開催が成立することが報告された。

- ・細谷代表理事より開会の挨拶がなされた。
- ・議長は、細谷代表理事が務めることが確認された。
- ・議事録は、鳥越理事が担当することが確認された。

I 審議事項

1. 第1号議案：第16回 神林賞「美術教育実践研究奨励賞」選考委員会結果について

選考委員長の水谷委員より、選考委員会にて対象者を浅尾知子（前津島市立高台寺小学校校長）会員に決定した報告がなされ、委員総会に提案することが了承された。

第2号議案：委員会委員選出規定変更について

新関理事より、委員選出規定の改正案が別紙にて示された。改正案について審議した結果、以下の通り改正案を変更し、これを委員総会に提案することが了承された。

第1条 ア) 地区部ブロックごとに1名の委員

→ア) 地区部ブロックごとに**若干名**の委員

イ) 各支部を代表する若干名を支部と理事会の協議により選出する。

→イ) 各支部を代表する**1名の委員**を**支部の協議**により選出する。

第10条 この規定は、総会委員総会の

→**第9条** この規定は、**委員総会**の

※第2条の削除に伴い、第3条から第10条が第2条から第9条となる。

また、新関理事より、今年度選出予定の委員の任期を法人理事の任期に合わせるため、2023年度のみ1年とするという提案がなされた。しかし定款の変更に関わるため継続審議とすることが了承され、委員総会で諮ることになった。

第3号議案：「選挙管理委員会」委員委嘱

細谷代表理事より、松岡宏明理事（委員長）、日野陽子委員、細谷僚一代表理事の3名を「選挙管理委員会」の委員として委嘱する提案がなされ、了承された。

なお、細谷代表理事より、投票率の向上のために選考方法をオンラインにする提案がなされた。これについては、方法の周知および移行期間を設ける必要性と、誰が誰に投票したかをわからなくする必要があるなど、方法については検討の必要があるという意見が出た。

第4号議案：査読研究論文の投稿締め切りの変更

藤田理事及び新関理事より、論文投稿数の増加及び二重投稿の防止を目的として2024年度より「査読研究論文」の投稿締め切りを現行の9月から3月末日に変更する提案がなされた。これについて、締め切りの変更に伴い発行時期によっては年度内の業績とならない場合や大会記録の掲載時期に問題が生じるなどの意見が出た。これを受け、投稿締め切り

を3月末ではなく5月末とし、査読結果が9月、発行時期を1月にするように提案が修正された。なお、投稿締め切りの切り替え時期の検討については委員総会に持ち越すこととなった。

第5号議案：「造形芸術峰育協議会」

大橋理事より以下の通り、開催日時の報告がなされ、出席予定者と本学会担当窓口の確認を行った。

第1回 2023年10月15日(日) 13:00～14:00
オンライン

第2回 2024年3月10日(日) 13:00～14:00
オンライン

- 出席予定者：細谷僚一、大橋功、松岡宏明、藤田雅也、清田哲男
- 幹事学会：大学美術教育学会（新関伸也）
- 本学会担当窓口：代表理事 細谷僚一

II 報告事項

- 第72回学術研究大会岐阜大会について報告がなされた。
大会委員長の浅尾先生より、参加者が149名、運営は実行委員（協力委員含む）26名で行うことが報告された。
- 第73回学術研究大会静岡大会について
藤田理事より日程、会場、記念講演講師等について報告がなされた。

庶務部

- 会員異動報告については委員総会でを行うことが了承された。

編集部

- 学会誌『美術教育』308号について
藤田理事より例年通り2024年3月末発行を進めていること、大会記録専門部会が8月11日より大会の記録を実施することが報告された。
- 学会誌デザイン、レイアウト変更および学会誌執筆に関する規定の変更について
新関理事より以下の提案がなされ、了承された。
今年度、大学美術教育学会と本学会で、和文要旨やキーワードの記述、引用文献や注釈等について共通の形式に変更することを検討する。またそれに伴い学会誌のデザイン、レイアウトの変更を検討していく。

その他

- 定款に合わせた諸規定の整理について
新関理事より整理に伴い各理事に内容の確認をお願いしたいという提案がなされ了承された。
- 新規学会ウェブページについて
新関理事よりHPビルダーにて作成中であることが報告された。
- 美術教育8団体連絡会について
大橋理事より、開催日時と場所、本学会からの出

席者について以下の通り報告がなされた。

日時：2023年10月1日(日) 13:00～16:30

場所：桜花学園大学

本学会出席者：細谷僚一代表理事、大橋功理事

- 今後の大会開催時期及び内容について
細谷代表理事より、次の提案がなされ委員総会に提案することが了承された。

第75回大会以降、開催時期を10月上旬に固定化の方向で検討を進める。理由は8月が台風シーズンで開催に不安があるため。また、「共同討議」を現状に合わせたプログラム名や方法に変更する。

一般社団法人日本美術教育学会 2023年度 第1回委員総会報告

日時：2023年8月10日(木) 13:20～14:30

場所：中部学院大学・各務原キャンパス

出席者：細谷僚一、大橋功、新関伸也、松岡宏明、藤田雅也、清田哲男、鳥越亜矢、詫摩昭人、森田ゆかり、石川和代、香月欣浩、横山徹、鈴木秀幸、水谷誠孝、福井一尊、監事：青木宏子、大会実行委員長 浅尾知子

欠席者：(委任状) 橋本忠和、中川泰、藤本陽三、日野陽子、監事：佐藤賢司

- 欠席者からは書面決議書が提出されていることが報告され、委員総会の開催が成立することが報告された。
- 細谷代表理事より開会の挨拶がなされた。
- 議長は横山徹委員が務めることが確認された。

I 審議事項

第1号議案：2023年度 第16回 神林賞「美術教育実践研究奨励賞」選考委員会結果について

選考委員長の水谷委員より、選考委員会にて対象者を浅尾知子（前津島市立高台寺小学校校長）会員に決定した報告がなされ、授賞が了承された。

第2号議案：委員会委員選出規定変更について

新関委員より、委員選出規程の改正案が提案され、了承された。

第1条 ア)「会長」→「代表理事」

地区ブロックごとに1名の委員

➡ア) 地区ブロックごとに若干名の委員

イ) 各支部を代表する若干名を支部と理事会の協議により選出する。

➡イ) 各支部を代表する1名の委員を支部の協議により選出する。

第10条 この規程は、総会の

➡第9条 この規定は、委員総会の

※第2条の削除に伴い、第3条から第10条が第2条から第9条となる。

また、新関理事より、今年度選出予定の委員の任期を法人理事の任期に合わせるため、2023年度のみ1年とするという提案がなされた。しかし定款の変更に関わるため、次回の理事会までに定款の見直しを行うこととした。定款の見直しの後、委員の任期の変更について検討することが了承された。

第3号議案：「選挙管理委員会」委員委嘱

細谷代表理事より、松岡宏明理事（委員長）、日野陽子委員、細谷僚一代表理事の3名を「選挙管理委員会」の委員として委嘱する提案がなされ、了承された。

なお、細谷代表理事より、投票率の向上のために選考方法をオンラインにする提案がなされた。多くの委員が本提案に賛同したが、投票方法の周知および会員のメールアドレスの登録など移行期間を設ける必要性について意見が出た。また、会員だけが投票できて、投票者が誰に投票したかをわからなくする必要性など、の方法について考えられる課題が挙げられた。今後オンライン投票に移行する方向で検討を進めることが了承された。

第4号議案：査読研究論文の投稿締め切りの変更

藤田理事及び新関理事より、論文投稿数の増加及び二重投稿の防止を目的として「査読研究論文」の投稿締め切りを現行の9月末日から5月末日に変更する提案がなされた。そのことにより、査読結果が9月に出され、学会誌発行は1月末となる。投稿締め切りの切り替え時期については、周知期間を経て2025年度の5月末日締め切りからとすることが了承された。このことについて、投稿規定程の記載内容を変更することが確認された。

第5号議案：「造形芸術教育協議会」

大橋理事より以下の通り、開催日時の報告がなされ、出席予定者と本学会担当窓口が確認された。

第1回 2023年10月15日（日）13：00～14：00
オンライン

第2回 2024年3月10日（日）13：00～14：00
オンライン

- ・出席者：細谷僚一、大橋功、松岡宏明、藤田雅也、清田哲男
- ・幹事学会：大学美術教育学会
- ・本学会担当窓口：細谷僚一代表理事

II 報告事項

- ・第72回学術研究大会岐阜大会について報告がなされた。

大会委員長の浅尾会員より、参加者が149名、運営は実行委員（協力委員含む）26名で行うことが報告された。

- ・第73回学術研究大会静岡大会について
鈴木委員より日程、会場、記念講演講師等について報告がなされた。

日 時：2024年17日（土）、18日（日）

会 場：静岡県立大学 小鹿キャンパス

大会テーマ：アートの意義と美術教育における存在
価値をみつめる

記念講演：尾池和夫氏（静岡県公立大学法人理事長・
静岡県立大学学長）

実行委員長：鈴木秀幸

庶務部

- ・会員の入会、異動、退会について報告がなされ、
了承された。

編集部

- ・学会誌『美術教育』308号について

藤田理事より例年通り2024年3月末発行で進めていること、大会記録専門部会が8月11日より大会の記録を実施することが報告された。また、学会誌デザイン、レイアウト変更および学会誌執筆に関する規定程の変更について報告された。

その他

- ・定款に合わせた諸規定を現状に合わせた沿って整理を行っていくする。
- ・細谷代表理事から大会開催時期について、8月は台風に影響されるため、10月初旬から中旬に変更して固定化できないかの提案がなされた。委員からは、10月は、会場候補となる大学では入試が始まっていること、教育現場は2学期が始まり学校行事がある時期であることが懸念事項として挙げられ、継続検討することとした。
- ・美術教育8団体連絡協議会について
大橋理事より、開催日時と場所、本学会からの出席者について以下の通り報告がなされた。
日時：2023年10月1日（日）13：00～16：30
場所：桜花学園大学
出席者：細谷僚一代表理事、大橋功理事

第72回日本美術教育学会 岐阜大会報告

2023年8月11日（金）～12日（土）に岐阜県各務原市にある中部学院大学にて開催されました第72回日本美術教育学会学術研究大会岐阜大会は、153名の参加により成功裏に終わりました。

酷暑の中、遠路お越しいただきました先生方には厚く御礼申し上げます。

前日のエクスカージョンの長良川の鵜飼いに始まり、共同討議、21件の研究発表、記念講演、ワークショップ、また今回は東京大会以来の懇親会の実施と盛りだくさんの内容で大変充実した大会となり

ました。

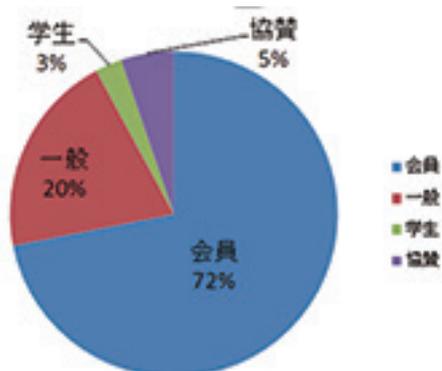
また、第16回 神林賞「美術教育実践研究奨励賞」は、浅尾知子（前津島市立高台寺小学校校長）会員に決定し、会員総会にて表彰式が行われました。

大会参加者 最終人数 153名
出席率 99.3%（欠席者1名）

参加者種別

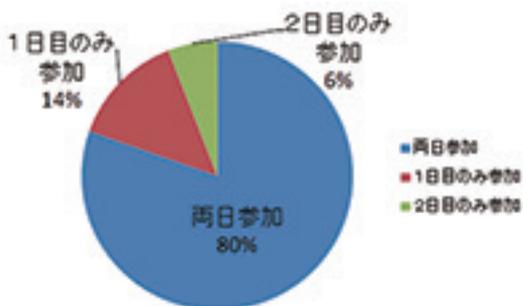
- ・会員 110名 72%
- ・一般 31名 20%
- ・学生 4名 3%
- ・協賛 8名 5%

注：学生ではあるが日本美術教育学会の会員の人は、学生ではなく会員で区分している。



参加日程

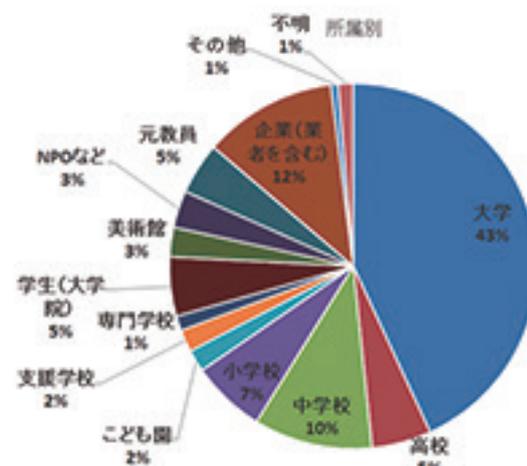
- ・両日参加 123名 80%
- ・11日のみ 21名 14%
- ・12日のみ 9名 6%



所属別の参加者内訳

大学	66名	学生（大学院）	8名
高校	8名	美術館	4名

中学校	16名	NPOなど	5名
小学校	10名	元教員	7名
こども園	3名	企業（業者を含む）	18名
支援学校	3名	その他	1名
専門学校	2名	不明	2名



共同討議風景



第16回神林賞授賞者の浅尾知子先生（右）

研究論文等の投稿締め切りが変更になります

論文投稿数の増加及び二重投稿の防止を目的として、研究論文及び実践報告等の投稿締め切りを **5月末**に変更します。学会誌発行は **1月末**を予定しています。

なお、この変更は、2025年度から、実施します。

創設 70 周年記念研究大会京都大会 (2021.10.2-3) と同様に、今から 12 年半程前に開催された創設 60 周年記念大会京都大会 (2011.8.21-22) についても、私は実行委員長を務め基調提案も担当いたしました。大会テーマは「新しい美術の学びをデザインする—これからの学校教育と美術教育の新たな地平」としました。基調提案では近代学校制度及び美術という制度の誕生とその終焉をパラレルな関係として捉え、21 世紀の学校教育のあり方とともに制度として美術史・美術館・美術教育を歴史的に俯瞰し、これまでの美術教育を総括し新たな地平を切り拓こうとしました。

北澤憲昭の『眼の神殿』(美術出版社 1989 年)・『境界の美術史』(ブリュッケ 2000 年)、佐藤道信の『〈日本美術〉誕生』(講談社選書メチエ 1996 年)・『美術のアイデンティティ』(吉川弘文堂 2007 年)、木下直之の『美術という見世物』(講談社学術文庫 2010 年)などの著書に示されているとおり、かつての日本には「美術」という概念はありませんでした。明治期に西洋をモデルに近代国家「日本」が成立しました。それにあわせて近代学校教育が立ち上がりました。同時に近代文化国家体制整備の一環として美術という概念が西洋から移植させられ「美術の制度化」が行われました。西洋の視点で日本美術史が編纂され、美術団体、展覧会、美術館、美術ジャーナリズム、美術教育機関が創設され、大正や昭和期の太平洋戦争後には大きなねりがあっても、基調となる考え方は今も続いています。

絵画や彫刻を純粋芸術として、デザインや工芸の上位に置くジャンルの階層性、自己表現など個の表現性を過大に尊重する価値観など、西洋近代の美術観の呪縛は今も続いています。

人類が誕生して、狩猟社会・農耕社会・工業社会・情報社会へと社会のあり方が進展し、内閣府が提唱する未来社会「ソサエティ 5.0」に突き進むのか。時代はポスト近代とでもいうべき歴史的転換点を迎えていることは確かだと思われます。とりわけ「課題先進国」といわれる日本において、「近代学校制度の終焉」という言葉がより実感をもって語れるようになってきました。佐藤学は著書『「学び」から逃走する子どもたち』(岩波ポブレット 2000 年)で苦役の「勉強」から創造的な「学び」への転換によって学校の再生を提起しました。しかし、子供たちの学校離れは縮小することなく拡大の一途をたどっています。2022 年度の文部科学省調査では小中高の不登校生は約 36 万人。もちろんコロナ禍の影響もあるとはいえ驚くべき人数です。日本財団の「18 歳意識調査」(2019 年)では「自分を大人だと思う」29.1%、「自分で社会を変えられると思う」18.3%、「社会課題について家族や友人など周りの人と積極的に議論している」27.7%でした。多くの国々の中で大差のある最低値です。社会の一員としての責任感や当事者意識が極めて希薄だと言わざるをえません。

それに加えて「教えから逃走する教師たち」という現象も起きています。教員の精神疾患による離職や休職率は年々増加傾向にあります。今や教師は就きたくない仕事であり、教育現場の教師不足は深刻です。教員の労働条件の改善や条件整備、教育予算の拡充などは急務です。

平成 20 年の中学校学習指導要領改訂「美術」の目標において「美術文化」という言葉が初めて使われました。このことを作家志向や実技偏重、美術の芸術的側面を中心に展開してきたこれまでの美術教育から、広く視覚(触覚)領域や身体と空間との関わり、非言語的世界を開拓し追究する教科に生まれ変わる大きな一歩としてとらえることもできます。

外側に「美術」をすえるのではなく、「美術」の芸術的側面をことさら強調するのでもない。美術は人が生きることにおいて、付随的・付加的な活動でもない。われわれが生きている日常の文脈や質が文化であり、「人との関係」「人とこととの関係」「人と人の関係」「ものとの関係」の総体をより豊かに再構築する営みの一つとして大きな意義と価値ある教育として再定義できるのではないのでしょうか。

明治期にもたらされた西洋近代をモデルにし誕生した近代学校及び美術という制度を遡行し再検証するとともに、加速度をもった社会の変化に対応した新しい学びのあり方を人類史的視野で根源的に問うことが、今求められているように思います。

細谷僚一 (一般社団法人日本美術教育学会 代表理事・京都デザイン&テクノロジー専門学校校長)

今年もやります！ 美術教育オンライン連続セミナー

奮ってご参加ください。専用フォームからお申し込みください。

一般社団法人 日本美術教育学会

美術教育オンライン連続セミナー

参加無料

全体テーマ

美術教育の志が

1月20日 (土)
太田 望
京都大学教育学部 講師

高校生に保育者養成を伝えるということ

新卒大学教員として、授業はさることながら、さらに課外活動も行うこと。また保育者養成教育の基礎知識も伝えること。これは、美術・造形教育でできることではないか、新卒なりに考えて取り組んでいることについてお話しします。

協会：香月成彦(西宮造形芸術大学)

1月27日 (土)
藤田 梓
岡山大学 非常勤講師

教室に国産がやってきた！—造形教育における高品質複製文化財の活用—

高品質複製文化財の教育分野における活用事例として、文化財活用センターの「デジタル・プログラム」についてお話しします。このプログラムは、博物館・美術館の複製品を学校等に貸し出し、子供たちが文化財に触れることを目的としています。子供たちが「自分たち(自分)の複製複製を使った鑑賞と制作」を行った経験についてお話しします。

協会：新田伸也(東海大学)

2月3日 (土)
水谷 誠孝
名古屋大学 准教授

素材から広がる表現—造形と音楽を交えた表現遊びの観点から—

「みる」「きく」という行為を通して、さまざまな素材から色や形、音などを感知して表現する活動は、子供から大人まで幅広く行われています。自分の感性や表現についてあらためて考えるきっかけになり、新しい見方や感じ方を発見することになります。造形と音楽の観点から、身体性・感覚性をつつた表現を紹介します。

協会：藤田伸也(静岡国立大学造形学専攻)

2月24日 (土)
勅使河原 君江
神戸大学大学院 人間発達環境学研究所 准教授

西田秀雄がとりこんだ子供の美術鑑賞活動—第二次世界大戦時下の国民学校にて—

西田秀雄(1914-1992)は自身も造形制作者だけでなく、京都府内の小学校教員として勤務するときに数多くの子供の美術教育に関する書物を残しています。本書は1944年(昭和19年)12月に発行された西田の著書『日本美術と児童画』に掲載されている戦時下の子供の美術鑑賞活動についてお話ししたいと思います。

協会：清田敦彦(岡山大学)

3月16日 (土)
森 弥生
岡山大学 非常勤講師
一般社団法人「みるを愛しびアートナビ岡山」社員

原点と広がり：フィリップ・ヤノウィン准教授 VTS 体験と現況の整理 岡大医学部教育への広がり

2011-12 に京都造形芸術大学(現：京都芸術大学)で VTC/VTS 准教授フィリップ・ヤノウィンによる 3 回(16 日間の連続講座を受講しました。基本の対話型鑑賞を体験していただき VTC/VTS 日本上路 30 周年記念フォーラム 2022 対話型鑑賞のこれまでとこれからでなされた経緯を踏まえつつ、現状を整理・協議したいと思います。また岡山大学医学部「ビジュアルアート教育(VTS) 講座」准教授として医学部への広がりをご紹介します。

協会：清田敦彦(岡山大学)

3月31日 (日)
牟田 淑子
長崎大学教育学部附属中学校 魅力的な授業を求めて

小学校・中学校・高校での正規教員の経験を経て、新しい時代を創っていく児童や生徒に対して貢献できる方を求めたい。

牟田淑子(2007)著「第52回(2017年)教育実践—実践的リテラシー—」を基に、実践を愛好する心を育てる美術教育のあり方—地域活性化アートイベントと学校現場の連携を通して—」を基に、長崎県教育センター研究員時代、コロナ禍から今に至る教育現場の実践についてお話をさせていただきます。

協会：中田幸(長崎大学)

すべての講座
14:00~15:00

講座 40分
質疑 20分の予定

協会のスタッフ・講師・事務局

OZOOM によるリアルタイムオンライン形式で行います。
 ○6つの講座の内、どの講座をいくつ受講しても構いません。
 ○申し込みの締め切りは、各講座の前日です。
 ○参加者希望者は Google フォームで申し込みを行い、ミーティング招待を受けます。
 ○申し込みは、<https://x.gd/9dEnw> または右の QR コードからお申し込みください。
 ○本件のお問い合わせは、日本美術教育学会 honbu@aesj.org (担当：清田君江) まで。



日本美術教育学会学術研究 大会研究発表申し込み要領

第73回静岡大会での研究発表の申し込みを、2024年4月1日より受け付けます。

前号の会報にも詳細を記しておりますが、2024年分より要領に変更事項もございますので、再度掲載をいたします（省略箇所あり）。静岡大会よりは、この要領で受け付けますので、発表を検討されている方は、よくお読みください。

発表方法

- 口頭発表を基本とします。
- A4用紙1頁分の発表概要を大会要項に収録します。その他の資料は発表者が必要に応じて用意してください。100部程度必要です。
- 発表に使用できる機材は、プロジェクターまたは大型ディスプレイです。ただし、使用する場合、あらかじめ申告してください。
- 上記機器に接続可能なパソコンや再生機器は各自でご用意ください。その場合、接続ケーブルも発表者がご用意ください。
- セキュリティの関係上、持ち込みの記憶媒体を使用するためのPCを会場側で準備することはありません。

発表時間

発表時間25分、質疑応答10分の合計35分（時間厳守）

なお、発表日程、会場については大会事務局で決まさせていただきます。

学会誌への収録

年度末に発刊する学会誌『美術教育』に発表内容を収録します。発表者による自己執筆になります。発表後に編集部から執筆依頼があります。

発表資格

発表者は以下の条件を**全て満たしている**必要があります。

- 本学会員であること（共同発表の場合も全員が本学会員であること）。
- 会費の滞納がないこと（申込みまでに発表年度までの会費の納入を済ませてください）。
- **本学会に1年以上在籍していること（年会費が納入された時点を入会日とし、発表申し込み時に入会1年が経過していること）**。学生（院生を含む）の場合、担当教員の推薦が必要（推薦状を提出のこと）。
- 年度末に発刊する学会誌『美術教育』の大会記録頁に報告原稿を執筆する意志があること。

発表申し込み内容と方法

以下の情報を記載の上、E-mail（発表概要はメールに添付のこと）にて申し込みください。

- 氏名、所属（大学の場合は学部まで、短期大学は学科まで記入。）及び肩書き、会員ID（以上、共同発表者がいる場合は全員分）
- 電話番号（携帯）（共同発表者がいても代表者のみで構いません）
- 研究発表の題目（二次案内作成段階で変更は可能ですが、その後は学会誌への報告を含めて、変更することはできません）
- 発表概要（**提出後に変更することはできません**。なお、HPで配信しますので、著作権、肖像権など研究倫理上の問題が生じないようにご注意ください）
※発表日時を希望することはできません。

発表概要

「発表概要フォーマット.docx」（学会HPからダウンロード可）を使って作成してください。**フォーマットを変更した原稿は受け付けません。**

発表申し込み〆切

2024年4月30日（火曜日） 23時59分

※〆切時間を過ぎての申し込みは、どのような事情があっても受け付けません。

発表申し込み先

静岡大会事務局 office-shizuoka@aesj.org

会員異動

（会報No.153号発行日以降届出分・敬称略）

【新入会員】

本田 郁子 岡崎女子短期大学
代田江理子 千葉県立柏陵高等学校
村瀬 歩 東京都立工芸高等学校

【退会】

林 理恵

異動があった場合は、なるべく早く本部（E-mail: honbu@aesj.org）までお知らせください。